

サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY

インドの子どもたちの教育のために
for Education to Every Child

CONTENTS

総会のお知らせ/会費納入のお願い/2007年新春特別企画/一橋大学インド調査報告/スペイン教育事情/舌で感じるインド/東京農大インド隊報



2006年2月に行われたアイキャンプ

2007年度総会のお知らせ

サマンバヤの会規約に基づき2007年度総会を下記の通り行います。

総会では2006年度事業報告、決算報告、2007年度事業計画等をお知らせします。

なお、里親会員、賛助会員、ボランティア会員の方で、出席できない方は、規約に基づき総会決議に対する委任状の提出をよろしくお願いいたします。郵送・FAX・e-mailにて受け付けます。

日時 2007年1月13日(土)午後1時ごろから

場所 東京 本郷 ラティオ・インターナショナル内

2007年度上期会費納入期限は12月25日です

2007年度の活動費になりますので、上期納入の里親会員の方、そして賛助会員の方、納入をよろしくお願いいたします。振込先は裏表紙参照。

2007年サマンバヤの会
新春特別公開企画

インド三大叙事詩完成に向けて

その成果と今日的意義（インド民衆の現状
と古典文学との触れ合い）

日時：2007年1月27日（土）

午後1時30分～5時

場所：早稲田奉仕園

定員：80名

参加費：500円（資料代を含む）

池田 運氏は本年6月、インドの二大叙事詩の1つ、マハーバータ（マハーバーラタ）翻訳全4巻のうちの第1巻を翻訳出版されました。

池田氏は既にシュリマード・バガバッドギータ（通称ギータ）を2000年6月に出版され、2003年6月には「ラーマヤン（ラーマヤナ）」を翻訳・出版されています。そして、大作マハーバータの翻訳に取り掛かり、その壮大な長編の4分の1をまず完成させました。

氏はこれまで「ガンジー自叙伝」をはじめ、私たち日本人が、英語の翻訳版からの日本語訳しか読めなかったインドの魂ともいべき書物を、着実に翻訳されてきております。この偉業は、まさに他に類を見ない功績ですが、あらためて池田氏の作業の今日的意義を捉え返した上で、この翻訳作業が与える今後の日本におけるインド文化の伝承の方向性について、当会の副代表でバンガラテイシュを中心に活動するNGO「シャプラニール」の代表理事も務める大橋正明（恵泉女学園大学教授）氏に語っていただきます。

第2部としては、これらのインドの古典文学がインド民衆の生活と密着しているところからも、現在のインドにおける影響と生活への関わりに関して、2006年に現地（ビハール州、ブッダガヤ/ボードガヤにあるサマンバヤ・アシュラムを中心にインド各地で様々な視察と体験をしてきた学生たちから、報告と問題提起を受けたいと思います。

インド北部を中心に2ヶ月近い調査を行った東

京農業大学のインド隊、経済的貧困層に対する支援策を研究した中央大学の海外ゼミ、そして、ビハール州に住む1万人以上の白内障患者がブッダガヤに集まり、いっせいに短期間で手術を受ける通称「アイ・キャンプ」の準備段階を視察し、指定カーストにおける差別問題を調査してきた一橋大学学生などに報告してもらいます。

そして、第3部として、サルボダヤ運動の伝道者として来日し、法華経の日本語訳を行いながら、自らサルボダヤ日印文化センターを主宰し、インドと日本の文化の交流を40年以上にわたって続けているナレシ・マントリー氏と池田運氏、そして、大橋正明氏を加えてパネルディスカッションを行い、人口10億人を超え、世界の超大国の仲間入りを果たそうとしているインドで、古典文学や古典芸能と民衆生活がどのような変容を遂げようとしているのかについて、あるいは伝えていかねばならないものは何なのかなどについて議論していただきたいと考えています。

第1部：基調講演1

マハーバータ翻訳にあたって（予定）
池田 運（いけだ はこぶ）氏 翻訳家

第2部：現地訪問レポート1

東京農業大学インド隊が見たサマンバヤ・アシュラムの子どもたち

現地訪問レポート2

中央大学経済学部・海外ゼミが見た子どもたちと民衆文化との触れ合い

現地訪問レポート3

一橋大学、卒業論文に向けた現地調査・指定カーストに対する優遇措置の実態

第3部：パネルディスカッション

インド民衆文学の大衆への広がりとの今日的意義

大橋 正明 氏（恵泉女学園大学教授）

池田 運 氏（翻訳家）予定

ナレシ・マントリー 氏（交渉中） 他

一橋大生インド調査報告

栗原 希 (KURIHARA Nozomi)

サマンバヤ・アシュラムに滞在した主な目的は、卒論のインタビュー調査でした。インドの憲法では、いわゆる「不可触民」と呼ばれてきたカースト(指定カースト・約 15%)、少数民族などの指定部族(約 8%)、そしてその他の後進階級(約 40%、諸説あり)に対する留保制度が定められています。公務員就職や国立大学入試の際、歴史的に差別を受けてきたグループに対して一定の優先枠をもうけることによって、そのグループを社会のなかに徐々に取り込んでいこうというのがその目的です。一方で、留保制度をもうけることによって大学に入学できなかったり職を得ることができなかったりする人がいることもまた事実で、6月にはデリーで医科大学の学生による大規模な反対デモが起きました。特に「その他の後進階級」に対する反発が強く、今回の滞在では賛成・反対両サイドに立つ人々の意識調査をしたいと思っていました。

しかし、約 10 日間アシュラムに滞在してインタビューを行った結果、憲法上の理念と現実が大きく乖離していることに気付きました。実際には留保制度はほんの一部の人によってしか使われておらず、特に指定カーストの多くの子どもたちは小学校を中退してしまうことが多いため、高校や大学、議席における留保制度を使うまでにいたっていません。さらに指定カーストのなかでも格差があり、ビハール州に約 20 存在する指定カーストのうち経済的に比較的恵まれている上位 4 つのカーストが留保制度枠の 95%を独占しているという現実も見えてきました。



アシュラムの子どもとアイキャンプ付き添いの子ども

2 週間の滞在スケジュール(11月)

- 10日 デリー着、宿泊
- 11日 電車でガヤへ
- 12日 アシュラム着
- 13日 アイキャンプの見学、休憩時間に留保制度について医師にインタビュー
カイヤールシュさん(アシュラムの卒業生)と会う
- 14日 ブイヤーンカーストの村(Parariya)にてリーダーにインタビュー
主にガヤ大学の学生が通う English School にて意見交換
- 15日 ブイヤーン&パスワーンカーストの村(Bapunagar)にてリーダーにインタビュー
元ビハール州観光局の人と話す
- 16日 ブイヤーン&ヤダブカーストが主に住む村(Parsawan)にて、留保制度を使ったことがある人にインタビュー
ガヤにて若者を対象とした NGO 活動をしている人にインタビュー
- 17日 AM大学の学長にインタビュー
指定カースト出身の大学生と少し話す
- 18日 政府の小学校の校長にインタビュー
ガヤ大学の学長にインタビュー
- 19日 指定カースト出身の元ビハール州教育大臣にインタビュー
- 20日 アシュラムの授業を見学、ドワルコジーにインタビュー
カイヤールシュさんにインタビュー
ガヤの統計局、教育局等に行きインタビュー。データを集める。
- 21日 指定カーストを対象とした NGO を運営している女性にインタビュー
引き続き教育局でインタビュー
電車でデリーへ
- 22日 デリー着
- 23日 デリーの記者の人にインタビュー
- 24日 友達と会う、飛行機で日本へ

スケジュールを見ていただくとわかるかもしれませんが、段々、インタビューの対象が教育分野に変化していきました。ガヤ県の教育状況は混沌としています。政府の教育は先生不足であまり機能しておらず、NGO は数百あるとも言われますが識字率は約 50%です。留保制度を機能させるためには、まずはその前にある基礎教育を充実させなければならないのではないかと感じました。サマンバヤ・アシュラムがあるビハール州は、インドで経済的に遅れている州のひとつに挙げられています。また、インド全体の指定カーストの割合は約 15%であるのに対して、ガヤ県ではその割合が約 30%です。今回、アシュラムの方をはじめいろいろなお世話になって現実を見ることができて、改めてガヤ県の教育システムや指定カーストの人々に対する留保制度のあり方について、考えたいと思うようになりました。本当にありがとうございました。

スペインに約一年半留学された、ボランティア会員の小野勝己さんにスペインから学ぶ教育を紹介してもらいます。

スペイン教育事情

小野 勝己 (ONO Katsumi)

犯罪の低年齢化、いじめの問題がまたマスコミで騒がれています。今に始まったことではありませんが、歴史は繰り返され、より悪質になっていると痛感します。問題はいろいろあると思いますが、その根本に人と人とのコミュニケーションがうまくできないという事実があると思います。

そこで、一年半のスペイン生活で感じたコミュニケーションで大切な基本的な礼、挨拶、というものを紹介します。

「オラ - - ! 」と言って、ぐ - っとそのラテン系の濃い顔を近づけてきて、私の両目をじい - っと見つめ、急に右、左と両頬をあわせ、ギュッと抱きしめて、背中をバンバン叩く。スペインの中でも情熱的といわれるアンダルシア地方でうけた私にとっては強烈な挨拶でした。道すがら、知り合いにあうと、「オラ、元気が、何かあったか」と

いい、先ずはベソ (キス) をする。そして話が始まる。男性どうしても抱き合い、ベソをする。年輩の女性からはより吸引力の強いベソを戴く。もちろん、ベソだけじゃなく、握手もしあうし、肩をもんだり、おへそをつまんだりする挨拶もある。とにかく、明るく、触れ合う。「ふれあい」が溢れ、笑顔も浮かんでくるのです。

ちなみに、日本人の挨拶のしかたは、鳥みたいだ、と言われたことがありました。両方で頭をさげたらぶつかるではないかと。それに、よく「ん、ん、ん」と首をふっている様が、おかしい、と。テレビや映画で見た風景から思ったのだろうが、いろんな見方があるものです。

あるとき「オラ」って日本語で何というのか？ 質問されました。そのときは、日本語には無いと答えたのです。

先日読んだ記事に、ある女子中学生が朝、「自宅マンションのエレベ - タで知らない人に「おはよう」と声をかけられ、恐かったということを母親に話した」というものが書かれていました。隣の方が誰かわからなくてもいい時代となり、近所におけるコミュニケーションも希薄となった結果、どんな歪みが今後起きてくるのか、恐ろしい気もします。

大人の都合で振り回されるために、子どもの教育に響いてくるのは確かなことだと思います。

抱きしめる、触れ合うことで、「情ってうつるものなんだ」とスペインで単純に実感しました。明るい挨拶はコミュニケーション不足を解消していく方法のひとつだと思います。スペイン風の挨拶を生活の中にとりいれてみたらいかがでしょうか？

サマンバヤの会ブログのご案内

<http://www.ratio.co.jp/blog/samanway>

お気軽に、どんどんいらして下さい。通信への情報提供も大歓迎です。

y2_pekko@yahoo.co.jp 佐藤までお気軽にお送りください。原稿に採用された方にはもれなくカラー版サマンバヤ通信を贈呈いたします。

舌で感じるインド

小宮 輝子 (KOMIYA Teruko)

～チャイ(CHAI)～

いまやインドの大衆的な飲み物として知られており、最近では日本でも、インド料理屋やアジアン食堂などでメニューに見られる。ミルク、砂糖、ときにはショウガ汁入りの甘くて濃厚なミルクティーである。インドでは、どこへ行ってもチャイが売っており、一杯 Rs3～5程度。電車の中でも駅に停車するたびに、チャイ屋が「チャーイチャーイ」と言って、やかんと小さな紙コップを持ってやってくる。小さなやかんの口から小さな紙コップに熱いチャイを注ぐのだが、その上手いこと上手いこと。絶対にこぼさない。ヤギのミルクから作るというそのチャイは、とても熱くて甘いのだが、あんなにホッとできる飲み物が他にあるだろうか。インドの蒸し暑さも雑踏も、疲れもカルチャーショックもすべてが吹き飛んでしまうほど安心できる優しい味である。

一重にチャイと言っても、それは土地や家庭、地域によって味が少しずつ違う。例えば、サマンバヤ・アシュラムでも朝・昼・晩ごはんにはチャイを出すのだが、アシュラムは子供が対象のため、チャイにショウガは入れず甘く作ってある。

インドの暑さを思うと、「蒸し暑さの中で甘ったるいチャイ(ミルクティー)は似合わない」とイメージする方もいると思うが、逆にその暑さの中でチャイを飲みたくなるのが不思議である。旅の道中で、チャイの飲み比べをするのもまたインドの旅の楽しみの一つであり、そこで生きる人々と土地を理解できる方法の一つかもしれない。

～サモサー(Samosa)～

マサーラーで味を付けたジャガイモを、小麦粉の皮で三角形にくるんで油で揚げたスナック。チャイ屋でも街中の屋台でもいたるところで売っている。一皿(2個)Rs10程度。

デリーのお店で、スタッフが目の前で揚げていた三角の揚げ物が気に入り、頼んでみた。それがサモサーだったのだが、揚げたてのサモサーは美味しい！外側がカリカリで中身はジャガイモがホカホカしている。スパイスが効いているせいか少し辛い。飲み物と一緒に食べることを勧めるが、ジャガイモと揚げ物の効果で結構おなか一杯になる。小腹が空いたときにもつまみたいスナックである。



街でよく見かける揚げ物(スナック)屋さん

中国・内モンゴル編

～モンゴル式しゃぶしゃぶ～

中国、北京以北でウイグル自治区のすぐ傍にある中国自治区内モンゴル。ここには横綱朝青龍関の出身地である外モンゴル(モンゴル国)と同じ民族であるモンゴル民族が住んでいるが、中国政府に自治されており、そこに住む人々は中国語で話し、中国料理に多い野菜の炒め物や羊の肉を主食としている。

今回は、中国と言っても、北京以北の内モンゴルに住むモンゴル族が極寒の地で寒さをしのぐために長年食べられているしゃぶしゃぶを紹介する。

日本の“しゃぶしゃぶ”と同じように、基本は大きな鍋の中の湯やだし汁で肉や野菜を湯がいていただく。しかし、日本のしゃぶしゃぶと違うのが、肉はラム肉であり、鍋の中は二つに仕切られていて、一つは鶏がらでダシがとってある白湯のスープ、もう一つは唐辛子で辛味がつけられている見た目も真っ赤なスープ。入れる野菜も様々で芋や白菜、豆腐、うどんなどである。ここでも驚いたのはサツマイモが桃のように薄いピンク色をしていたこと。そして、うどんは二種類あって、ラーメンのような細面とほうとうのような太麺が用意されていた。麺に関して言えば、細麺の方がスープに絡んで美味しかった。

しかし何と言っても主食は肉である。ラム肉。ラム肉は独特の臭みがある。それゆえに店中はその匂いで蔓延し、初めてモンゴル式しゃぶしゃぶを試す人は少々抵抗があるかもしれない。ここで

初めての人にオススメなのが、鶏ダシのスープよりも唐辛子のスープで食べるほうが良いということだ。臭みのあるラム肉ゆえに辛いものと一緒に食べた方が肉の臭みを感じないからである。そのダシが効いた肉や野菜は辛いが逆に後を引く美味しさである。

内モンゴルは10月後半から長くて寒い季節に入る。モンゴル族の人々は、その寒さを凌ぐためにしゃぶしゃぶで暖をとり、肉や野菜で栄養をつけるという。

私は以前、タイでも、ダシ汁のスープに肉や野菜を湯がいて食べる“タイスキ”を食べたことがある。アジアの国々には似たような食べ物が沢山あるが、その食べ方だったり入れる具はまるで違う。その土地特有のスタイルやニーズ、文化、習慣に合わせた食べ方や食材があって、その違いなどを見つけながら食すのもまた面白い。



モンゴル風しゃぶしゃぶ

東京農大

第9次インド隊報告

今回はインド隊がお世話になったハリアナ州ドラ村のホームステイと JICA の養蚕支援プロジェクトの様子をご紹介します。

小林美晴 (KOBAYASHI Miharu)

首都デリーから北へ車で3、4時間。ハリアナ州、グルガゴン村の農大の先生から紹介していただいた、ナレシーさん一家に約1週間ばかりお世話になりました。都市部にはないインドらしい文化に触れることができ、とてもうれしく感じました。驚いたことといえば、既婚者の女性はどんな男の人にも(一緒に行った大畑君は特別だったようですが) 髪の毛はもちろんのこと、顔

もサリーで覆ってしまっていて見せないことや、家で一番の権力者はおばちゃんだったり、水牛を飼って、とれたミルクをラッシーにしたり、朝はみんな散歩がてらペットボトルに水を入れ、広がる畑のどこかで用を足しにいたり、はみがきは庭に植わっているニームという木の枝(これがまたにがい!)を使っていたりなど、ここに書ききれないほどたくさんありました。

そんな中、改めて思ったことは女性の立場について。私がお世話になった家のお母さんは23歳にして2人の子持ちで、朝起きたときから本当に夜の休息のひと時まで家事に追われているように見えました。朝は日が昇る前から起き出し、ご飯の用意や洗濯、子どもの世話、家の中や庭の掃除、農作物の収穫の時期には収穫作業も加わり、夜も遅くまでやるのがあって、寝るのも一番遅いなど。それでも私たちがお世話になった家は比較的裕福だったようで、ラッシーを作る機械があったり、粉をひく機械があったりしました。「勉強をしたいがその時間がない。でも、時間がないことは周りの女性もみんなそうだし・・・。」とそのお母さんは言っていました。当たり前のこととして受け取っているように見えました。女性の社会進出の背景には、経済の発展があり、女性が家事から解放されるようになって余裕ができて、初めて考えられるようなことだと思います。インドでも経済発展が進み、都市部では女性が働いている姿がちらほら見うけられました。この波が農村部まで浸透するのか、はたまたそれが良いことなのかどうか。女性、そして人間にとってはなにが本当に幸せなのか…。いろいろ考えさせられました。



ホームステイ先の女性たちと

JICA のプロジェクト

「インド養蚕普及計画」の視察

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

私は大学の先輩と同輩の3人で今年の2～3月にインドを訪れました。そこで私たちは途上国の現状を知り、自分たちが目指す開発と国際協力について学びたいと思い、JICA¹のプロジェクトを視察してきました。

以下は、JICA がインドで行っている養蚕プロジェクトを視察して感じたこと、さらに、担当者から伺った話をもとにまとめました。

インドの女性が身にまとうサリーは、結婚式などの正装から普段着に至るまで、現在でも幅広く愛用されています。実際に私たちは、一部の都会の若い女性がジーンズや T-シャツといった服装を着ているのを目にしましたが、やはりほとんどの女性がサリーを着ていました。このインドで伝統的な衣装であるサリーの高級品はシルクで作られています。インドは古くから養蚕が盛んな国としても知られていますが、伝統的な養蚕は熱帯特有の品種の蚕を使っているために、日本や中国のもの比べて繭や生糸の品質、収量の面で大きく劣っています。また、ヒンドゥー教にとって神聖な生き物である牛の糞を蚕の飼育室に持ち込み病気を防ごうとする慣習があり、こういった宗教上の迷信も生糸の品質を落とす原因になっています。

このため、インドでは毎年1万トン以上の生糸を中国やブラジルなどからの輸入に頼っていて、このような現状を改善するためにインド政府は生糸の量と質の向上を目指して、養蚕業技術が優れている日本に技術協力を要請しました。サンダルから宇宙衛星まで作ると形容されるように、自国で作れないものはないという自信を持っているインドが日本に技術協力を求めたということは状況がかなり切迫していたということが分かります。

日本政府は1991年から技術協力を始め、今では長年にわたる研究や地道な活動のおかげで

2002年からJICAが研究した高品質の生糸を生産するための養蚕技術を、インドの養蚕農家に本格的に普及させていくプロジェクトを開始しました。このプロジェクトは2007年までに6,700トンの生糸を増産し、生産高を今の約1.5倍にしようという計画です。そのために、JICAは日本の養蚕技術を習得した養蚕農家を5年間で3,600戸数増やすことにしました。JICAの指導を受けた養蚕農家は「JICAファーマー」と呼ばれ、品質が高く、一種のブランドとして、JICAファーマー以外の農家とは区別され、繭の値段も1kgあたり20～30ルピー分高値で取引されています。私たちが訪問したJICAファーマーも以前よりも収入が上がったと言っていて、数人の労働者も雇っていました。しかし、ここまでにくるのには最初に銀行などからお金を借りて、新しい設備費などに多額の投資が必要とのことでした。そのため、貧しい小規模な農家にとってはこのプロジェクトに参加すること自体が難しいのではないかと考えられます。

このプロジェクトチームのリーダーである柳川さんによると、2006年3月の時点で、JICAファーマーの数は2,486戸数となり、目標の約7割を達成して、このまま順調に行くと3,600戸の目標は十分達成できる見込みとのことでした。さらに、最近ではJICAの技術を真似して品質の良い繭を作る農家も出てきているらしく、数値以上の成果もたらされているとのことでした。

インドの人口の約7割の人たちが農業分野で働いていますが、近年、インドは目覚ましい発展を遂げてきていて、工業分野やIT分野でさらなる飛躍が予想されます。一方、農村部では昔ながらの農法がまだ生きており、貧富の格差はさらに広がっていくと予想されますが、JICAが行っているこのプロジェクトがそれに歯止めをかけ、インドの貧困層の人たちの生活向上につながり、インド経済の底上げに大きく貢献する可能性があるのではないかとこの視察を通して強く思いました。

□ ¹ JICA (Japan International Cooperation Agency.) は世界約100カ所で活躍している国際協力機構。

サマンバヤの会とは

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムに対して主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。

里親といっても日本へ子どもを連れて来て、養育するわけではありません。養育費を負担して、インドのサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。

1人の里親の申し出があった時点で、アシュラムでは周辺の家庭からアシュラムでの養育を望む子どもたちを受け入れます。その子どもに対して5年間、養育費を送ります。そして、その5年が過ぎ、さらに5年間を子どもはアシュラム内の農作業などをして生産の助けをしながらアシュラムで生活をします。そして、「卒業」ということとなります。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちへの諸費用を出していくという仕組みです。

サマンバヤ・アシュラムとは

サマンバヤ・アシュラムはガンディー翁の高弟の1人、ピノーバ翁が創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあっています。

インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。

サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン（不可触民）の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

入会案内

里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。

里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育をはじめます。

5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することとなります。

支払い方法 5年一括 120,000 円

1年ごと 24,000 円

半年ごと 12,000 円

いずれかの方法でお送りください。

会費のうち、1年あたり14,000～15,000円(120USドル相当)をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。

会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

入会方法

入会のきっかけ、経緯、TEL、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申込書として本部宛に郵送またはFaxしてください。会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

会員証は発行していません。

継続の場合

会員として継続される場合

会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

退会

会を退会する場合、速やかに文章で(郵送またはFAX)お送りください。

但し、里親会員で会費未納分については請求する場合があります。

郵便振替口座 番号 00260-3-15712

名称 サマンバヤの会 宛

編集後記

親戚がやっている東京・渋谷の小さくレトロな喫茶店でお手伝い兼バイトをしています。すぐに人がいっぱいになってしましますが一歩中に入ると渋谷の街の喧騒がうその様です。

私はコーヒーが飲めないのですが、モカやキリマンジャロを淹れるときのサイフォンにはつい見入ってしまいます。

それでは皆様メリークリスマスそして良いお年を。Y.S

宛発行：2006年12月9日(隔月第二土曜日)

発行人：サマンバヤの会

本 部：〒299-4423 千葉県長生郡陸沢町大上 3615-3

TEL・FAX：0475-40-9795

東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5-1-16

NP-ビル5F 東大教育研究所内

TEL：03-3815-3035 FAX：03-3818-1219

印刷：株式会社ラティオインターナショナル